

# QOL

No.24

## QOL サポーター 新潟

Quality Of Life



10月9日(土)・10日(日)、本学にて伍桃祭(大学祭)が行われました。今年のテーマは、「STAND BY～支えたい～」。当日は学内外から約3,500人をこえる多くの方々にご来場いただき、さわやかな秋晴れの下、キャンパスのいたるところで多くの笑顔が見られる大変賑やかなイベントとなりました。

### INDEX

- 対談企画
- 医療技術学部 臨床技術学科 紹介
- 院生研究紹介
  - ・福祉事務所におけるソーシャルワークの現状と課題
  - ・脳卒中片麻痺者の装具が歩行へ及ぼす影響
- 「第10回新潟医療福祉学会学術大会」開催報告
- 学外実習体験記
  - 理学療法学科 / 作業療法学科 / 言語聴覚学科 /
  - 義肢装具自立支援学科 / 健康栄養学科 /
  - 健康スポーツ学科 / 看護学科 / 社会福祉学科
- 平成22年度「総合ゼミ」発表会報告
- CAMPUS NEWS
- 伍桃祭を終えて
- 受験生のみなさんへ





医療経営管理学部 医療情報管理学科 教授  
国際交流委員長  
伊藤 隆



健康科学部 健康栄養学科 教授  
国際交流委員  
村山 伸子

## 太平洋諸国の生活習慣病を減らすための リーダー育成がJICA研修

独立行政法人国際協力機構(JICA)では、政府開発援助(ODA)の一環として、太平洋諸国の栄養、運動、健康指導のための人材育成を目的とする研修を行っています。

本学は保健・医療・福祉に関する総合大学として、看護学・栄養学・運動指導・リハビリテーションの全てに関する教育・研究を実践していることから、昨年度より3カ年計画でJICA受託事業として研修員の受け入れ及び学内外での研修を行っています。

村山 生活習慣病予防に関するJICA研修の実施機関は全国に2カ所あります。1つは愛知県の「あいち健康の森」。もう1つは、大学として初めて選ばれた本学です。同研修は、生活習慣病予防の指導や対策計画を立案して普及できる人材を育成する事が目的です。約1ヵ月に渡る研修で栄養・運動・看護のプログラムを実践します。

伊藤 JICA研修員は看護師など各国の地域の代表者です。今年で2年目となりますが、昨年1回目は研修員7名。今年はソロモン、フィジー、マーシャル、トンガから計5名の参加となりました。今年の具体的な研修内容を教えてください。

村山 本学健康栄養学科、健康スポーツ学科、看護学科の教員がチームになり、多彩なプログラムを展開しました。プログラムの最初は



「日本における生活習慣病の現状と対策」の講義。次に高血圧、糖尿病など疾患別のプログラムへと続きました。その後、運動や栄養、禁煙、飲酒、実践的なメンタルヘルスなどの面から「どのよう

に生活習慣を変えていくか」をテーマとしたプログラムを行いました。さらにライフステージ別の取り組みを学ぶため小・中学校、地域のスポーツクラブ、特定健診の現場などの見学も行いました。最後に自国で実施するアクションプランを作成しました。同研修は、研修で身に付けたことをもとに研修員がリーダーとなり、それぞれの国や地域で生活習慣病対策を実行することが目的ですから、なるべく研修員の国や地域の実情にあわせて行うようにしました。合計20名以上の教員が関わっています。

## 地域レベルの交流を通して 国際社会に貢献する大学へ

伊藤 見学先の反応はどうか?

村山 地域の受け入れ態勢は良かったですね。研修員は皆、陽気ですから、どこへ行っても歓迎されていました。

伊藤 また、新潟県副知事や新潟市長も表敬訪問しました。研修員の受け入れは、地域間交流、国際交流のきっかけにもなる活動ですね。

村山 日本の国際交流に、少しは貢献しているかなと思っています。

伊藤 地域の皆様だけでなく学内においても、学生たちは良い刺激を受けたようですね。

## 本学国際交流活動の一環である JICA研修について、 伊藤教授と村山教授に 対談していただきました。

村山 はい。とくに健康スポーツ学科の学生や健康栄養学分野の大学院生は、積極的に活動に関わってくれました。さらにその中には、青年海外協力隊に来年参加する学生や大学院生もいます。

伊藤 村山先生は研修チーフとして、どのような感想を持たれましたか?

村山 研修員の健康面や事故が心配でしたが、無事に終わってほっとしているところが正直な感想です。

伊藤 昨年の研修の成果がすでに出ている地域があるようですね。

村山 ソロモン諸国です。太平洋諸国では健診がほとんど行われていませんが、ソロモン諸国から来た研修員が帰国後、国に健診の計画を出してそれに予算が付き、地域ベースでの健診がスタートしたようです。さらに地域での栄養教育も始まっているようです。

## JICA研修の今後の課題と展望

伊藤 今は研修の1ヵ月後に、

JICAが進行状況を確認していますが、3カ年計画の最終年度となる来年は、本学教員が現地へ赴きフォローアップする計画があります。しかし1回で終わらせることなく、継続的に評価するフォローアップ体制が必要だと思います。



村山 そうですね。直接、専門知識を持つ本学教員が継続的にサポートすれば、今よりも早く生活習慣病予防対策が広がります。それには予算が必要なので、各国やJICAの支援を期待しています。

伊藤 さらに効果を高めるには、国や地域の実情に合わせて研修内容に変化をつけたり、社会学者などの他分野との連携など、広い視野でとらえたいですね。

村山 JICAを通じて長期的なプロジェクト形式にしていければ、青年海外協力隊の学生と組んでのフォローも可能です。他の大学や機関との連携など、新たな展開も考えられます。

伊藤 開発途上国において生活習慣病予防は、これから認知されていく分野。国際交流委員会の活動のひとつとして、ぜひ継続していきたい活動です。

村山 ただし生活習慣病予防は一次予防の段階なので、できれば医療やリハビリも含めた本学ならではの活動で世界に貢献したいと思っています。

伊藤 今後に向けて、JICA研修の改善点があれば教えてください。

村山 学内の受入体制はおおよそ確立されましたが、研修員から、「教員とのディスカッションをもっと設けて欲しい」、「研修途中でまとめる時間が欲しい」といったような細かい要望がありましたので、さらなる受入体制の充実を図っていきたいです。

伊藤 国際交流委員会では、海外学術交流や海外研修、留学生の受け入れ、海外の大学との連携などを推進しています。中でも、私はJICA研修のように学生や教員が海外にどんどん出て行き、現地の人と汗をまみれて気持を一つにする活動を大事にしたいと思っています。本学は「アジアの保健・医療・福祉・スポーツの大学としてナンバーワンになる」という目標を掲げています。その一歩がJICA研修なのです。

# 医療技術学部 臨床技術学科

2011年4月  
新設!

臨床工学技士と臨床検査技師のダブルライセンスにより、従来の資格の垣根を越えて高度先端医療の最前線で幅広い業務に対応できる臨床技術者を育成!



現在、日本の医療は、深刻な医師・看護師不足、それに伴う業務負担の増加など、様々な課題を抱えています。そうした状況の中、質の高い医療サービスを提供するために「チーム医療」が実践され、また、近年では医師以外の専門職が医療行為を行えるようにする「Task-shifting」※の導入が検討されるなど、高度な専門知識・技術に加え、より幅広い知識・技術を有したスペシャリストの育成が強く求められています。

※今まで医師しかできなかった業務について、他の職種に委譲することにより、医師以外の他職種も業務できるようにするという考え方

本学科において養成する臨床工学技士と臨床検査技師の二つの国家資格を有する臨床技術者は、多くの医療行為の「Task-shifting」が可能でスペシャリストであり、チーム医療の一員としてQOLの向上、更には日本の医療の質の向上に貢献できる人材であると考えています。

## 目標とする資格!

### ● 臨床工学技士

科学技術の発展にとまじり、ハイテク化が進む医療機器・装置の操作・点検・管理を行うスペシャリストです。心臓手術などで使用する「人工心肺装置」、透析治療などで使用する「血液浄化装置」などの「生命維持管理装置」を操作し、医師とともに治療や患者管理に直接関わります。他にも、人工呼吸器やペースメーカーなど、さまざまな医療機器・装置を安全に効果的に活用するための保守・管理業務を行います。

### ● 臨床検査技師

主に病院等の医療機関において、患者様から採取した血液や尿を検査する「検体検査」、身体に検査装置を装着して心電図や脳波などを検査する「生理学的検査」など、さまざまな検査業務を行います。また近年では、最新の検査機器を用いた遺伝子検査や移植治療の検査も行うなど、高度な検査技術に加え、検査機器に関する知識を有した人材が求められています。

## ① 教育の特徴

## ダブルライセンス取得に対応し臨床技術者を養成する独自のカリキュラム

臨床工学技士と臨床検査技師の国家資格取得に必要な科目をすべて配置し、学生全員で2つの資格の取得を目指します。4年次にはそれぞれの病院実習を連続して行い、将来、臨床技術者として活躍するための実践的なスキルを身につけます。

また、保健・医療・福祉の総合大学であるメリットを最大限に活かし、既存の9学科と混成で学ぶ「連携教育」を実践し、チーム医療で求められる他職種との連携やコミュニケーションスキルを学びます。

### ダブルライセンス取得に対応し、臨床技術者を育成する独自のカリキュラム

- 人工呼吸器・人工心肺装置などの生命維持管理装置の操作
- 各種医療機器の点検・管理
- 医療機器の研究・開発
- 人工臓器などの先端医療への技術提供

#### 臨床工学技士の役割

- 検体検査・生理学的検査などの各種検査
- 検査データの分析および提供
- 採血
- 遺伝子治療・再生治療などの先端医療への技術提供

#### 臨床検査技師の役割

臨床技術学として、それぞれの科目を並行して学ぶ

#### <臨床工学系の学び>

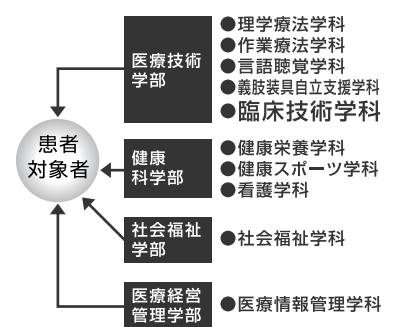
医用工学や医用治療機器学などの講義・実習を通じて、臨床工学技士としての専門性を高めます。

#### <臨床検査系の学び>

微生物学や臨床血液学などの講義・実習を通じて、臨床検査技師としての専門性を高めます。



### 既存の9学科との「連携教育」でチーム医療を学ぶ



## ② 学びの環境

臨床技術学科は、学内実習施設として「第6研究・実習棟(仮称)」(5階建)を建設しております。この校舎では、3階に臨床工学系、4階に臨床検査系、5階に顕微鏡室の合計5つの実習・実験室を配置し、臨床技術者として必要なさまざまなスキルを実践的に学ぶことができます。また、自習や休憩スペースとして活用できる学生ラウンジや研究室も配置されるほか、食堂施設がある隣接施設「第3厚生棟」と渡り廊下で接続し、校舎間の移動がスムーズにできるよう工夫されるなど、教育・研究・学生生活を総合的にサポートする機能を備えます。

## ③ 卒業後の進路

二つの資格を取得することにより、高度先端医療を実施する医療機関はもとより臨床工学技士・臨床検査技師の両方の求人先から希望の施設を選択することが可能となり、より幅広いフィールドへの就職を目指すことができます。また就職活動においても、業務の効率化や人件費抑制など、採用側にとっても大きなメリットを生み出す人材として就職活動を有利に進めることができます。

- 大学病院・総合病院・専門病院等の医療機関
- 医療機器メーカー
- 検査・検診・血液センター
- 医用工学関連企業
- 食品・製薬関連企業
- 保健所・保健センター
- 都道府県・市町村職員(医療職)
- 教育・研究機関
- 大学院進学 など



# 院生研究紹介



## 福祉事務所におけるソーシャルワークの現状と課題

修士課程 社会福祉学専攻 保健医療福祉政策・計画・運営分野2年 春木 邦子

私が在籍する丸田研究室では、現代社会が抱える福祉問題に対応する法制度や政策等をソーシャルワークの視点から分析・解明する院生が、それぞれの関心の所在に基づいて研究に取り組んでいます。児童厚生施設が果たす役割や発達障害児支援におけるソーシャルワーク機能、介護ボランティア制度などについて、自らの職務や経験を通して得た知見を明らかにしています。

私の研究課題は「福祉事務所におけるソーシャルワークの現状と課題」です。第二次世界大戦後のわが国には心身に傷を負い働けなくなった者、稼ぎ手を失い収入の道が途絶えた者など、生活に困窮する人が多く生まれました。これらの人々を公の責任の下で適正に支援することを目的として、都道府県及び市に福祉事務所が設置されました。福祉事務所は福祉行政における「第一線の現業機関」と規定され、要支援者に対する個別的な直接支援を行うと同時に、支援を通じて福祉事務所の所管する地域の課題を明らかにし、その課題を地域で解決するための方法を考えていく重要な役割を担っています。

終戦から60年以上を経て社会情勢は大きく変化し、これに伴って福祉制度も変貌を遂げました。介護保険法や障害者自立支援法の施行により、福祉事務所による直接支援は一つの節目を迎えたといえます。一方で地方分権一括法の施行や市町村合併などにより、新たな地域福祉の構築が必要とされている現在、福祉事務所には今まで

以上に「第一線の現業機関」として地域の実情を知り、必要とされる制度や社会資源の開発に結び付けていく責務が課されていると言えるのではないのでしょうか。そのためには、福祉事務所におけるソーシャルワークが現在どのように機能しているのか、あるいは福祉事務所のソーシャルワークに関する課題は何かを明らかにすることが、私の研究課題です。

大学院での活動は、専攻内中間発表などを通じてお互いの研究テーマや研究内容に触れることで、自分が知らない社会福祉の現状を知り、自分一人では持ちえない新たな視点を得ることができ、ひいては自らの研究や今後の職務への活用、社会活動への展開につながっていくことを実感しています。保健・医療・福祉などの実践で生じた疑問や関心について研究・解明したいとお考えの方は、ぜひ一度見学にいらしてください。お待ちしております。



## 脳卒中片麻痺者の装具が歩行へ及ぼす影響

修士課程 保健学専攻 義肢装具自立支援学分野1年 藤枝 温子

私は義肢装具自立支援学分野の真柄研究室に在籍しており、担当教授である真柄先生の専門はリハビリテーション医学・整形外科です。研究を進めるにあたって医師でもある真柄先生の立場から指導を頂き、そして義肢装具学分野では本学科の東江教授に助言を頂いています。それぞれの先生方の専門領域からアドバイスを頂き、楽しく充実した研究をしています。

私は、先生のもとで「脳卒中片麻痺者の装具が歩行へ及ぼす影響—短下肢装具の足継手軸方向が脳卒中片麻痺者の歩行に及ぼす影響—」をテーマに修士論文へ着手しています。

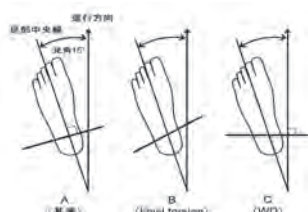
私の研究で対象とする脳卒中片麻痺者は、主な症状として、痙性、筋緊張亢進、内反尖足などの運動機能障害、いわゆる歩行障害を呈

します。これらの麻痺症状に対して歩行機能を獲得するため、一般的に短下肢装具が用いられています。短下肢装具は歩行訓練の初期(麻痺の程度:プルストロームステージII~Ⅲ)によっては、

足継手付きの短下肢装具を用います。通常、その足継手は図のAに示すように、足部中央線に直交するように設定します。しかしこの足継手軸の設定では、臨床における観察では、麻痺側立脚期において外側方向への不安定を訴えることがあり、またその不安定による筋緊張(共同運動パターン)を助長し歩行困難とすることがあります。

そこで私の研究では、短下肢装具の足継手軸設定方向に着目し、設定方向によって歩行時の筋緊張・安定性などについてどのような影響を及ぼしているのかを観察し、三次元動作分析装置・動作筋電図による評価をもとに解明することを目的としています。

この研究によって脳卒中片麻痺者にとって、より良い短下肢装具における足継手軸設定方向を提言したいと思っています。



# 「第10回新潟医療福祉学会学術大会」開催報告



10周年記念講演 山本学長

## 学術大会のテーマ

新潟医療福祉学会は、平成13年の発足以来、健康・医療・福祉分野との連携、共同研究の発展のために、毎年学術大会を開催しています。今回のメインテーマは「ライフ・イノベーション」ということで、「世界の中の日本」を常に考え、グローバルに医療・保健・福祉を考えていく必要性を本学術集会から発信することができました。

## 学術大会の様子

当日は、学会員を中心に過去最高の約200名が参加し、盛大に開催されました。開会式の後、山本 正治学長による10周年記念講演があり、今後の予防医学をライフイノベーションという視点からどう考えていけばよいか、大変貴重なお話を聞くことができました。

午前中の一般口述発表では、健康科学系、社会福祉系とセッションが分かれ、各分野の先生方からそれぞれ興味深い発表がありました。また、ポスター発表では、健康科学(基礎)、健康科学(運動)、臨床、教育・連携という4つのテーマにわかれ、基礎的な研究から臨床研究、地域社会活動や教育・連携における研究まで多方面にわたる分野のポスターが同一フロアに貼られました。自分の関係する分野のみならず他分野の発表者のポスターを見ることができ、活発な意見交換がなされていました。本学の大学院生や学外の病院や施設の先生方による発表も多数あり、本学会が規模も徐々に大きくなり対外的にも認知されてきた印象をもちました。

午後の特別講演では、新潟大学大学院の木竜 徹先生にお越しいただき、「自分にふさわしい運動をいつでもどこでも」と題して、工学系の難しい内容を大変分かりやすくご講演いただきました。最新の機器とヒトの運動の融合を目指す先生の研究に、これからの日本の医療問題を解決するためのヒントが数多く隠されており、大変刺激的なご講演でした。

特別講演後、「ライフ・イノベーションを支えるスーパー専門職」と題するシンポジウムが、本学健康スポーツ学科の西原 康行先生を座長に行われました。理学療法士・言語聴覚士・管理栄養士・体育教員や健康運動指導士・看護師・社会福祉士の抱える問題点とそれを解決するために必要な制度や方法を分かりやすくお話しいただき、それぞれの分野が高度に専門化していくことの重要性を再確認することができました。

閉会式では本年度より創設された学会会頭賞、学会奨励賞の表彰式が行われました。会頭賞は残念ながら該当する演題がなかったのですが、奨励賞には5名の方々を選ばれ、代表して新潟リハビリテーション病院作業療法士、佐藤 大樹先生がスピーチを行いました。本学会が臨床と研究の架け橋として重要な位置づけであり、臨床現場の先生方にとっても意義のある学会であると感じました。

## 本学学生がスタッフとして参加

今回の学術大会には、本学理学療法学科の4年生がスタッフとして参加し、会場係・照明係・受付係・マイク係等、様々な業務に従事しました。学会がどういふものか分からない学生にとって、少々戸惑いはあったようですが、業務にも徐々に慣れてきた様子で、今後理学療法士として活動するうえで大きな経験になったことと思います。

また、本年度より本学学生が、研修の一環として、聴覚障害の方をサポートするために必要なパソコンテクを行いました。これは、講演の内容をリアルタイムにパソコンで入力し、スクリーンに表示するもので、様々な職種の医療関係者を養成する本学ならではのサポートとなりました。

## 最後に

本年度は10回目という節目の大会を盛大に開催することができました。年々参加者数や演題数も増え、今後の更なる発展を予感させる内容となりました。来年度も本学言語聴覚学科の粕谷先生を大会長に第11回学術集会が開催されます。来年度も多数の皆様のご参加をお待ち申し上げます。

## プログラム

9:30 ~ 開会式	13:20 ~ 一般演題(ポスター発表)
9:35 ~ 10周年記念講演 山本 正治 学長 「予防医学研究40年の経験を通して語る これからの保健医療福祉問題」 ～ライフイノベーションの視点から～	14:25 ~ 特別講演 講師 木竜 徹 先生(新潟大学大学院 電気情報工学専攻 教授) 「自分にふさわしい運動をいつでもどこでも」 ～個人向け運動支援ユビキタスシステムの開発課題と実現へのアプローチ～
10:25 ~ 一般演題(口述発表)	15:15 ~ シンポジウム 「ライフ・イノベーションを支えるスーパー専門職」
12:00 ~ 新潟医療福祉学会総会	16:25 ~ 閉会式



特別講演木竜先生(右)と大会長大西先生



受付の様子



ポスター会場の様子



シンポジストの先生方



学会奨励賞受賞者の先生方



# 学外実習体験記

## 臨床実習で学んだこと

理学療法学科 4年生 中村 拓成



今回、私は東京都にある東京厚生年金病院で10週間臨床実習をさせていただきました。東京厚生年金病院には本館と別館があります。本館は主に急性期病棟で、脳血管障害や骨・関節疾患、癌疾患など幅広い疾患に対応しています。別館は脳血管障害などの方の回復期病棟、整形外科疾患の方が入院している病棟があり、1階はリハビリテーションを行うフロアとなっています。今回、私は別館にて脊髄損傷の患者様と整形外科疾患の患者様に携わらせていただきました。実習では、教科書には載っていないことも非常に多かったのですが、実習指導者の先生方や、スタッフの方から様々なアドバイスをいただき、非常に多くのことを学ぶことができました。苦労した点は、患者様の評価を行い、その結果を十分踏まえた上でどのような方法でアプローチを行うか、またそのアプローチ方法をどうやってうまく患者様に伝えるかという点です。理学療法士には知識だけでなく患者様一人ひとりに合わせた柔軟な考え方が非常に重要だと痛感しました。また自分が行ったリハビリで患者様が動作をできるようになったときの喜びも感じることができ、その時の患者様の笑顔を見てリハビリテーションのやりがい、楽しさを実感し、理学療法士になりたいという気持ちが更に強くなったと感じています。さらに、コミュニケーションの重要性も改めて実感し、理学療法士として治療的な技術だけでなく、患者様と一人の人間として接し、良い聴き手としてのコミュニケーション能力もさらに高めたいと感じました。この実習で得た様々な視点で考える姿勢を大切に、これから理学療法士として働いていきたいと思っています。



この実習で得た様々な視点で考える姿勢を大切に、これから理学療法士として働いていきたいと思っています。

## 総合臨床実習を終えて

作業療法学科 4年生 小田 文子



私は、総合臨床実習の身体障害領域において静岡の急性期病院へ行きました。実習を迎えるにあたって不安と緊張でいっぱいでしたが、この2ヶ月間の実習では大学の机上では学ぶことのできない貴重な経験をさせていただくことができました。実習が始まった時は、患者様と関わる上で身体機能面ばかりに目を向けてしまい、肝心の精神面へのアプローチに欠けていました。しかし次第に、自分なりに患者様のわずかな表情の変化や何気ない動作の変化に目を向けることを意識して接することで、少しずつ視野を広げることができました。特に患者様とのコミュニケーションの大切さや、他職種の方たちとのチームアプローチの重要性を感じることができました。実習中、患者様が以前まで困難であった動作が徐々に可能となり、動作獲得へと結びついた時の嬉しそうな表情が今でも忘れられません。この経験から、作業療法士1人の力だけでなく、家族や他職種とのチームアプローチが重要だということを感じることができました。1人の患者様に対して多くの職種の方が携わることで、様々な視点から考えることができ、それによって患者様により良い治療を展開できることを経験することができました。この実習を通して実際の臨床現場を経験し、自分の知識や技術の不十分さを改めて感じ、作業療法士を目指すにあたっての課題や目標を見つけることができました。そして、更に作業療法士を目指す思いが強くなりました。今後も不十分であると感じた点や見つかった課題を見つめ直し、日々学ぶ姿勢を大切にして知識や技術を深められるように励んでいきたいと思っています！ご協力いただいた患者様、熱心にご指導して下さいました先生方、大変ありがとうございました。

## 総合実習を終えて

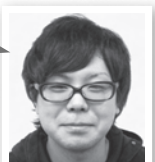
言語聴覚学科 4年 安部 冬美



私は福島県の病院にて8週間総合実習を行いました。実習は日々のレポートに追われたり、訓練プランの立案にとっても苦労したり、その時は大変だと感じたことも改めて振り返ってみれば毎日が勉強となった8週間であったと思います。特に訓練プランの立案に関しては、初めての経験でしたので試行錯誤しながら行っていました。なかなか上手くいかず、本当にこれでいいのか？と不安に思っていたところ患者様が「徐々に言葉が出るようになってきた」と言って下さり、私の立案した訓練が少なからず改善に繋がっていた事に、やりがいと喜びを感じました。しかし同時に、自分の立案した訓練が患者様の人生を左右する可能性があることも強く感じ、改めて言語聴覚士の仕事の重みを感じました。また、言語聴覚士には専門的な知識だけでなく、総合的なコミュニケーション能力も必要だということ学びました。特にフリートークは相手の意思を推測する能力や話しやすい雰囲気作りなどが必要となり、言語聴覚士は幅広い知識と能力を身につけなければならないと痛感しました。今回の実習を通して、言語聴覚士としてのやりがいと心構えを自覚しました。今後は本当の意味で患者様の力になれるような言語聴覚士を目指して、様々なことに自覚と興味を持って学びたいと思っています。無事に実習を終えるまで、たくさん指導していただいた本学の先生方、病院の言語聴覚士の先生方、評価・訓練に協力していただいた患者様には本当に感謝しています。

## 臨床実習で感じたこと

義肢装具自立支援学科 4年 郷 貴博



今回、東京都三鷹市にある福祉用具貸与事業にて4週間の臨床実習を行わせていただきました。主な実習内容は施設内にて福祉用具の整備、施設外では用具導入のアセスメント(事前評価)や福祉用具の搬入から適合(利用者に合わせて調整すること)、モニタリング(利用者の現状を観察して把握すること)を行いました。また福祉用具勉強会やサービス担当者会議への同席、住宅改修の現場調査の見学など、福祉用具の導入判定(選定)からモニタリングまで用具供給全体の業務を学ぶことができました。私が今回の実習で強く意識したことは、福祉用具導入までどのようサービス精神を持って利用者様と接すれば良いのかということです。福祉用具は義肢装具と違い、利用者様のお家でアセスメントからモニタリングまで行います。そこでは、利用者様のご迷惑にならないよう様々なことに配慮する必要がありますがありました。最初は慣れずに実習担当の方の見様見真似でしたが、玄関の入り方や、靴の脱ぎ方、言葉遣い、視線の高さ、姿勢など、少しでも失礼がないように接するよう心がけました。今後、社会に出るにあたり、製作・適合技術云々の前にこのような基本的な礼節が必要であると改めて感じました。また、利用者様が何を考え、何を要求しているのかを察知するニーズの把握が大変重要だと感じました。用具販売と言っても、やはり最終的には人と人との交流があり、そこには思いやり、察知型サービスが重要であると感じました。今回の実習で感じたことを意識して少しでも多くの社会貢献をし、義肢装具士として、より上質なサービスを提供できる専門職として活躍したいと思っています。

本学では今年度、8学科が学外実習を行いました。

実習に行って来た学生が日頃の学習内容を活かし、学外で学んできた実習の成果を報告してくれました。

## 臨時実習で学んだこと

健康栄養学科 3年生 塚野 靖子



私は、今年の11月に小学校の実習(給食経営管理実習)に行き、栄養教諭からご指導をいただきました。栄養教諭による給食時の5分間栄養指導、給食の調理や残食調査、その他の業務などを実際に拝見し、とても貴重な体験をさせていただきました。私も実習中に2年生、4年生、6年生のクラスで給食時の5分間栄養指導を行わせていただける機会に恵まれました。2年生には「ジュースのひみつ」というテーマで実際に飲むジュースを見せながら、スティックシュガー何本分の砂糖が入っているという話をし、飲み過ぎると虫歯など体に良くないことが起こることを指導しました。4年生には「大豆の力」というテーマで、大豆に含まれるたんぱく質は肉や魚よりもアミノ酸スコアが高く優れているということを分かりやすく説明し、大豆の良さについて指導しました。また、その日の給食に出た納豆や豆腐に興味を持ってもらうことも目的としました。6年生には、「骨骨(こつこつ)ためようカルシウム」というテーマで、カルシウムは吸収率が良くないので、吸収を助ける他の食べ物と一緒に食べることの重要性を説明しました。学年によって反応はとても様々で、戸惑うこともありましたが、たった5分の栄養指導で児童を理解に導くためには、インパクトがあり興味をひく教育や話だけでなく、見せて学ばせる教育の大切さを感じました。また、給食の献立作成は栄養教諭、調理(約650食)は5人の調理員さんが行っていました。栄養教諭は、初めのうちは献立作成だけでなく、調理にも入っていたと仰っていました。それは献立を作成するにあたり、実際の調理の様子を知ること、また、調理員さんとのコミュニケーションを通して学ぶことが、より良い献立作成につながるからだとのことでした。児童に安心・安全・美味しい食事を提供するために、人との繋がりを大切にしている考えにとっても共感しました。実習で学んだことを糧に勉学に励み、将来に活かせるよう努力していきたいです。



## 「教育実習」で学んだこと

健康スポーツ学科 4年 池田 沙織



今年の10月末から、母校である新潟西高等学校で3週間の教育実習を行いました。授業観察、実習授業の経験、生徒との交流など、大変忙しく、かつ充実した3週間でした。教育実習に参加するに当たっての私の目標は、生徒たちが「楽しい」と思える授業を行うことでした。私自身の卒業論文のテーマも「体育授業の楽しさ」についてであり、これまで学んできたことを実践で活かす場として位置づけました。全員が楽しいと思える授業を展開できるのかは、体育が得意で体を動かすことが好きな生徒ばかりではありませんのでとても難しい課題でした。そこで授業の内容を2つの点で工夫しました。1つは中間で交流する機会を増やすこと、もう1つは上達を実感できる内容を盛り込むことでした。テニスや器械運動など様々な授業を担当させていただきましたが、その中でグループ課題や繰り返しの課題を増やすことによって、生徒がお互いに声を掛けたり喜んだりといった風景が見られ、多くの先生が参列する最後の研究授業でも、生徒は楽しく授業に参加してくれました。今回の実習では、ご指導いただいた体育科の先生方の授業展開が非常に素晴らしく、生徒と向き合う姿勢についても多くを学びました。55分という授業時間の中で、40名を超える生徒への指示や、全員の運動量の確保、スムーズな集団の動かし方など、様々な工夫がなされていました。今回の教育実習では、教育者という側面だけでなく、社会人として相手に配慮することの重要性やその責任について深く考えるきっかけとなり、大変貴重な経験となりました。この経験を活かし、より大きな視野を身につけて社会で活躍していきたいと思えます。



## 地域看護学実習で学んだこと

看護学科 3年 白石 果歩



今回の地域看護学実習で最も学んだことは、保健師が住民に笑顔で接することで住民も笑顔になり、健診時に親身に相談にのることで、住民の顔から不安が消えるという、保健師と住民との関わりについてでした。このような保健師の関わりが、住民との「つながり」をより強いものにしていくのだと感じました。保健師は地域住民をよく知り、地域住民が持っている健康課題を見つけ、それを解決するための保健事業を計画していました。その計画も地域住民がより興味をもてるように様々な工夫を行い、地域住民が健康へ目を向け行動をおこせるように働きかけていました。地域住民の健康づくりのために、保健師は第一線で行動し、なくてはならない存在であると改めて感じました。また、「他職種連携」の現場に多く立ち会うことが出来ました。他職種との連携により、1人の住民を様々な視点からみることができ、情報を共有することで保健師だけでは把握できないことを把握し、その方に一番合った方向性を見出すことができます。他職種で関わることは、それぞれの分野のプロフェッショナルの意見を取り入れることであり、支援の質はより上がると思いました。今回の実習を通して、人々が出る限り健康で暮らすためには予防がまず大切であると感じました。同時に、障害を抱える人が生きにくくならないように、地域住民全体に働きかけることも大切であると感じました。今後、地域看護学で学んだ保健師の住民への関わり方、そして援助の質を高めていくための他職種連携の必要性について、私が現場に出たときには是非取り組んでいきたいと思っています。



## 学外実習から得たもの

社会福祉学科 3年 高野 庸子



私は、学外実習で、地域包括支援センター「つまりの里」に4週間お世話になりました。実習では、指導者の方と訪問に同行し、家族から虐待を受けている方や、老朽した家で一人暮らしをしている方と実際に関わらせていただきました。実の息子からネグレクトを受け、食事や入浴を十分にさせてもらえない状況のなかで「家族と共に暮らしたい」と涙を流して訴える方や、老朽した不衛生な家であっても「自宅暮らししたい」と切なそうに訴える対象者の方を目の前にして、私は今まで感じたことのない衝撃を受けました。人間らしく生きるとは一体どういうことなのかを改めて考えさせられ、自宅暮らしすることの意義と問題点を同時に学ぶことができたように思います。また、対象者の方を支援していく上で、なぜこのような状態になっているのか、対象者の言動の背景は何であるのかを常に洞察していく姿勢も学ぶことができ、福祉に携わる者として持つべき視点を再学習することができました。対象者の方の持つニーズやコミュニケーションの方法は一人ひとり異なり、誰かと同じ支援というものには存在しないのだということを実感することができたため、今後も利用者主体という考えや、人間の尊厳を守る視点を大切にしていこうと思いました。今回の実習では、社会福祉士として働く魅力を再確認できたとともに、教科書だけでは感じることのできない現場の雰囲気、職員の方の連携、対象者の方のニーズに実際に触れることができ、とても貴重な体験をすることができました。今後も理論と実践の両方を大切にしながら、社会福祉士として働いていきたいと思っています。

# 平成22年度 総合ゼミ

平成22年9月17日 開催

## 発表会報告

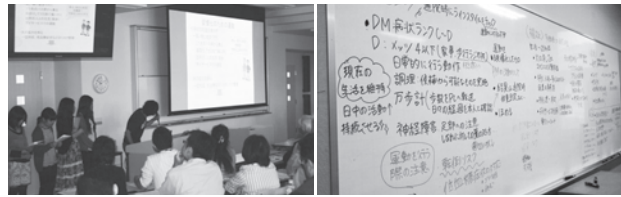
「総合ゼミ」とは、本学の特徴的な取組みのひとつである「連携教育」の一環として、4年次前期に開講されるゼミで、これまで学内外で修得した専門知識・技術を総動員し、チーム医療などについて実践的に学んでいきます。またゼミでは具体的な症例をもとに、関連する学科が混成でグループを形成し、グループワークを通じて対象者のQOLの向上に向けた具体的な支援策について意見交換し、検討結果を発表します。

9月13日(月)～9月17日(金)の期間で行われた今年の総合ゼミでは、本学開学以来初めてとなる他大学の学生参加を受け入れ、新潟薬科大学薬学部学生4名が、本学学生と一緒にチームの一員となりその学びに加わって頂きました。

今回は最終日に行われた総合ゼミ発表会の様子をご紹介します。

### Report.1

## 高齢者の糖尿病



平成19年厚生労働省国民健康・栄養調査報告では、「糖尿病が強く疑われる人」、「糖尿病が否定できない人」の推計は、2,210万人となり、はじめて2,000万人を超え、年々急増の傾向にあります。糖尿病患者は、内臓脂肪蓄積・肥満とインスリン抵抗性を基盤として耐糖能異常、脂質異常症、高血圧や動脈硬化のリスクを高めるメタボリックシンドロームを併発する患者も多く認められ、医療コストの著増につながっています。

本グループでは、この症例の支援に必要な理学療法学科・健康栄養学科・健康スポーツ学科・看護学科・社会福祉学科と新潟薬科大学の学生でチームを形成し、「各専門分野から考えられる支援策のキーワードは何か」を考え、1つのテーブルでディスカッションを行ないました。はじめこそ、各学科間の考え方の違いにどう様子を見せていた学生でしたが、進めていくうちに学科間での情報が整理され、1つの目標に向かって支援策がまとめられていくことが感じとれました。また、治療効果を生むためには専門職間で情報を共有しアプローチしていくことの大切さを学んでくれたと思います。

今回の総合ゼミでは、高齢化していく糖尿病患者に引き起こってくる合併症である糖尿病性腎症、糖尿病網膜症などの予防対策に薬物療法の重要性についても専門的な視点から意見が提案され、支援策をまとめたことは大きな成果であったと思います。また、患者・家族へのアプローチに他職種の仕事の理解、知恵を出し合い連携して作業を行うことで最善の治療法、換言すれば無駄の治療は何かを習得することができました。今回の「総合ゼミ」参加学生は専門職としての理解を、より深めたと感じました。

担当教員代表 渡邊 榮吉

### Report.2

## 脳卒中後の摂食・嚥下障害



私が総合ゼミにかかわるようになり、5年目となりました。本学に先駆的にカリキュラムに組み込まれたこのインタープロフェッショナル教育(専門職間の連携を重視した教育)をふりかえってみると、この5年の間に大きく成長したと痛感させられます。

今回の「脳卒中後の摂食・嚥下障害」のテーマは、理学療法学科・作業療法学科・言語聴覚学科・義肢装具自立支援学科・健康栄養学科・看護学科・社会福祉学科の7学科から構成される学生たちで意見交換されました。

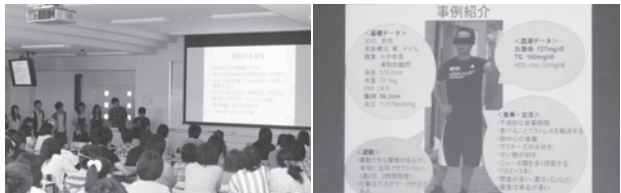
日を経ることにより良いチームワークが形成され、それぞれの専門性が発揮され、連携が実践されているのを目のあたりにしました。行き詰まりそうになった場面もありましたが、KJ法(各自が自分の意見をカードに記述して、カードをカテゴリーごとにまとめて全体の考えを整理する手法)を用いて各自の意見を整理したり、用語集を各自で作成して他領域の相互理解に役立てていました。演習室には、真剣に討議する声、そして互いを信頼し合う笑顔に溢れていました。

学生たち自らの力で積極的に情報を収集し、問題を解決し、一人のクライアントの支援プランを立案にまでたどり着く姿に頼もしさを感じ、卒業後、彼らはよりよいQOLサポーターとして活躍するだろうと確信することができました。

担当教員代表 西尾 正輝

### Report.3

## メタボ改善プログラムの提供



私達の総合ゼミは「メタボリックシンドロームの対象者を分析し、専門家チームとしての評価に基づき、協力して対象者の支援策を考察する」ことを目標として、理学療法学科・健康栄養学科・健康スポーツ学科・看護学科の4学科の学生が集まり、生活改善プランの作成を行いました。

模擬対象者は、メタボリックシンドローム予備軍である本学教員で、模擬対象者の身体計測、体組成評価、体力測定、血液検査結果、生活習慣など実際の情報をもとにして、生活改善プランを作成しました。

具体的には、対象者へのインタビューから、支援策の立案に必要な情報を収集、問題点を抽出、支援策の立案、プレゼンテーション作成を行いました。特に身体計測、体組成・体力測定については、実際に学生自ら測定も行い評価しました。また、食事内容についても詳しく調査し、結果に基づき目標のエネルギー量を算出し、健康栄養学科は、摂取カロリーの減少など改善策を提案しました。理学療法学科と健康スポーツ学科は具体的な運動プログラムを提案し、実際に対象者に実践指導まで行いました。現場の指導を想定すると看護学科は保健師、健康栄養学科は管理栄養士、理学療法学科と健康スポーツ学科は運動指導員として休養・栄養・運動の各方面からチームで取り組むことができました。

各学科の専門性(用語・知識・認識)の理解が難しいようでしたが、用語集を作成し共通理解の努力をして、他職種を理解、また他職種に分かりやすく自らの職種を理解してもらった工夫がなされました。今回のメタボリックシンドロームの予防・改善というテーマのもと、複数の学科と課題に取り組み、連携の必要性を学んだようです。

担当教員代表 佐藤 敏郎



Report.4

在宅認知症患者と家族への生活支援



今回の総合ゼミでは、理学療法学科・作業療法学科・言語聴覚学科・看護学科・健康栄養学科・社会福祉学科の6学科、計14名の学生と教員6名で活動しました。ゼミでは大学の所在する新潟市北区に実際に居住されている、ある認知症の患者さんとご家族、そしてそれを支える医療・福祉の専門職のみなさんを対象としたフィールドワークでした。まず初めに、学生は、患者さんとご家族の生活と介護への取り組みをまとめたビデオを見ました。その後、患者さんの担当医と、実際に患者さんが利用されているデイサービスセンターのケアマネージャーに、インタビューをさせていただき、情報収集を行いました。これらの場で、学生は自分の学科の専門性を生かして情報を収集したあと、それらを整理し、ご本人とご家族を支えている地域での支援の現状をまとめる作業を行いました。そして、次のステップとして、現状の分析と将来への提案をまとめました。

学生たちにとって、このゼミの活動は想像していたものとはかなり違ったものだったと思います。学生からは、「もっと自分がわかっていると思っていたけれど、知らなかったこと、他の学生から学んだことがたくさんあった」「自分に何ができるのか、漠然としたイメージしかもっていなかったけれど、これまでに学んできたことがいろいろな面で通用することが分かった」という感想を話していました。今まさに療養と介護が進行中の実在の患者さんという事実の厚みと重みから学ぶことで、学生の視野は徐々に、そして確実に開けていると思います。

担当教員代表 今村 徹

Report.5

高齢者の再骨折予防と生活支援(大腿骨頸部)  
—QOLの維持・向上を目指して—



今回の総合ゼミでは、理学療法学科・作業療法学科・義肢装具自立支援学科・健康栄養学科・健康スポーツ学科・看護学科・社会福祉学科の7学科の学生が集まりました。検討モデルは、「転倒により大腿骨頸部骨折をした高齢女性」で、「早く家に帰りたい!」というご本人の希望を受け、術後リハビリテーションから退院後の在宅支援までのケアプランを作成しました。

本人の気持ち、住環境、日常生活動作、栄養、服薬管理、夫への支援、社会資源の活用、在宅リハビリ等について、ご本人の生活の様子を想像しながら具体的なプランを立案しました。「①再転倒・再骨折予防」「②入院前の生活に少しでも近づけた生活維持」「③精神面・地域交流」を支援の柱としました。プラン作成にあたっては、経済面の配慮や社会資源が充実していない地域でより良い支援をするための工夫に苦労しました。また、より良い支援を行いたいという理想に対し、現行制度の限界も感じ、社会福祉制度について見直しの必要性を感じることもとなりました。今回の検討を通して学生たちは、他職種と議論を重ね自身の視野が広がり、支援の幅を広げることにもつながりました。さらに他職種と連携することで学生自身がダイレクトにアプローチできないときでも、間接的にであればアプローチできるという強みも知ることができました。その中でも特に『ご本人のQOLを高めるために他職種と連携し、同じ目標に向かって協力することが必要』、『自身と他職種の専門性を理解することでよりよい連携ができる』という学びが得られたと思います。ぜひ卒業後にもこの学びを実践に活かして欲しいと思います。

担当教員代表 北村 香織

Report.6

高齢者の再骨折予防と生活支援(腰椎)



高齢者の再骨折予防と生活支援(脊椎圧迫骨折)は、昨年度の総合ゼミから継続している「大腿骨頸部骨折」の姉妹事例で、今年度新しく開講した事例です。事例対象者は、骨粗しょう症、腰椎圧迫骨折で入院治療した一人暮らしの男性高齢者です。メンバーは新潟薬科大学の学生2名と、理学療法学科・義肢装具自立支援学科・健康栄養学科・健康スポーツ学科・看護学科・社会福祉学科の学生で構成され、2グループに分かれておこないました。

事例は夜間転倒したことが骨折の原因であることから、自宅での再骨折予防を目標とし、QOLの維持向上をふまえた支援について考えました。2グループとも新潟薬科大学の学生が参加したことにより対象者の理解の幅が広がり、豊かな支援策を議論することができました。

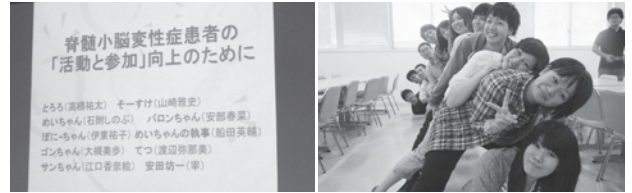
発表では、入院期、退院期、在宅期と分けて各時期に応じたきめ細かい支援策を発表しました。退院期では、「連携と情報共有によって在宅生活を送るために準備を整える」として、薬剤師が「病院薬剤師と調剤薬剤師の連携」を、社会福祉士が「サービス調整」を、理学療法士が「通所リハビリ」との連携」を、看護師が「訪問看護師との連携」を発表しました。また在宅期では、「再骨折予防のための他職種間の連携の必要性」を発表しました。

学生は、発表の最後に「それぞれの専門性が理解できた」「連携を楽しく学ぶことができた」とまとめていました。他職種の専門性を理解し連携の楽しさを知った学生が、卒業後、他職種を尊重し楽しく連携して働くことのできる専門職になることを確信した総合ゼミとなりました。

担当教員代表 丸山 敬子

Report.7

「活動と参加」向上のために



私たちの総合ゼミは6学科(理学療法学科・作業療法学科・言語聴覚学科・義肢装具自立支援学科・看護学科・社会福祉学科)10名のメンバーで構成されており、教員も学生と同様の学科から選出されています。これは、本グループのテーマが脊髄小脳変性症という難病が対象となっているためです。この疾患の特徴としては進行性の疾患であり現在の状態に加えて、未来を見据えた問題点の抽出・アプローチ方法が必要となります。よって、病院等での医療分野のアプローチと施設や地域資源を活用する福祉分野のアプローチの両方が非常に重要になってきます。

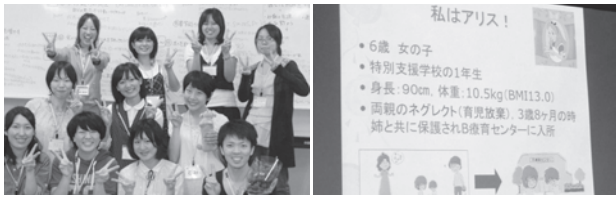
ゼミ開始直後より、各学科の得意分野を交えながらの討論となりました。討論の中で他学科のことで、分からない内容があれば細かな説明を加え、また同じ単語であっても分野によっては意味が異なることがあり、確認し合いながら進めていきました。次第に対象者に対する個々のアプローチから、全員が対象者を中心とした同じ方向へのアプローチへと変化していきました。非常に良いアプローチがたくさん出たために、「どれをどのように伝えたら良いのか?」についてまとめるのに苦労しましたが、皆で協力し、膨大な情報量を簡潔に分かりやすくまとめることができました。

私は昨年に引き続き2回目の事例担当ですが、今回も学生のうちから多職種連携を学習していれば、就職してから他職種と連携する際に非常に有利だということを感じました。皆の今後のQOLサポーターとしての活躍に期待しています!!

担当教員代表 泉 良太

Report.8

## 児童虐待に伴う精神発達遅滞児の発達支援 ～「アリス」の気持ちになって考える～



今回の総合ゼミでは児童虐待という今日の重大な社会問題の一つを取り上げました。児童虐待の対応や防止にはあらゆる保健・医療・福祉の専門職によるチームアプローチが不可欠です。本ゼミの構成メンバーも7つの学科、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・義肢装具士・看護師(助産師・保健師)・管理栄養士・社会福祉士を目指す学生の皆さんです。本ゼミではネグレクト(養育放棄)によって発達を阻害された実例を通して発達支援プランを作成しました。当初はそれぞれの専門を活かした支援を考える方向で取り組んでいましたが、3日目に行った療育センターの見学を経て変化が見られました。学生たちは「被虐待児の気持ちになって考える」というアプローチを行い始めたのです。それは「アリスだったらどう思うだろう」という対象者の視点に立つことでした。アリスというのは被虐待児のAちゃんに付けられたニックネームです。いつの間にかAちゃんはアリスという名で呼ばれ、アリスを中心に支援プランを作り上げていき、最終的にはメンバーはアリス自身になり、アリスの代弁者となって発表を行いました。

この事例で最も大切だと学生が考えたのは「養育者との愛着の欠如を、アリスが療育施設の中での人との暖かい関わりを通して少しでも取り戻せたら良い」ということでした。そのことに自ら気づいていった学生の感性とチーム力の素晴らしさに感動した一週間となりました。

最後に、施設見学を快く受け入れ、実際の専門職の活動や連携の素晴らしさを教えてくださった療育センターのスタッフの皆様へ感謝申し上げます。  
担当教員代表 松井 由美子

Report.9

## 長距離アスリートの摂食障害



検討モデルは競技レベルの高い女子高校生の長距離ランナー(陸上競技)で、極端なカロリー制限と激しいトレーニングによって低体重と無月経が続き、体型への歪んだ認識を持っています。疲労骨折を契機に受診し、長期的無月経による骨粗鬆症が疑われました。食行動異常、無月経、骨粗鬆症という組み合わせは、「Female Athlete Triad」(女性競技者の3徴)と呼ばれ、競技者の健康問題の代表例です。

総合ゼミ開始時にまず驚いたことは、各学生が事前に各々の専門的文献をあたり、この障害の基本的事柄について詳しく調べていたことでした。万全の準備のもと、対象者に関わろうとする彼らの誠実さの中に、早くもスペシャリストとしての姿勢を感じたのでした。

また最初の議論では、対象者のニーズである「できるだけ早く競技復帰したい」という目標が何の疑いもなく受け入れられていましたが、「健康を害してまで競技を続けることが理解できない」という学生の勇氣ある発言をきっかけに議論が深まったことも印象的でした。「競技から離れた方が実は幸せだよ」「でも対象者のニーズも大切にしたい」「いま引退することが幸せなのか」。こうした葛藤を経て「どうすれば健康的に競技復帰できるのかをみんなで考えよう」といった踏み込んだ共通目標が見つかりました。

5日間こうしたプロセスを何度も重ね、素晴らしい発表をしていた学生たちに心から敬意を表したいと思います。そして、総合ゼミに参加した今回の経験について、何年後かに社会で活躍する皆さんとぜひ振り返ってみたいものです。  
担当教員代表 山崎 史恵

Report.10

## 子ども虐待対応における行動連携



総合ゼミでは、本年1月に東京都江戸川区で発生した児童虐待死亡事例に対して、各メンバーが将来就くであろう専門職の立場から検討を進めました。まず、各専門職種がそれぞれの法令上の責務、対応上の問題点等を明確化し、次に、各メンバー間で、「市町村児童家庭相談援助指針」、「養護教諭のための児童虐待対応の手引き」並びに「児童虐待防止に向けた学校における適切な対応について」などの関係通知を指標にして事例の概要と連携図を整理しました。

第一線の現場の専門職を迎えてのケース会議には、メンバー全員と担当教員が出席し、新潟県中央児童相談所の田代相談判定課長並びに新潟市北区健康福祉課の曾我主査(保健師)との間で活発な議論を行いました。

総合ゼミのプロセスを通して学び得た結果は次の通りです。

①実効的な行動連携を図るためには、高い職業的論理観と自らの役割や任務に責任を持つことの出来る実践力が前提となること。②子どもの生育歴や家族歴、これまで採ってきた処置と結果、これから採ろうとしている対応の有効性と限界等との関連において現症と置かれた環境を構造的に捉える専門性が必要であること。③すべての事例について、行動連携の実際～実際に採った処置とその結果～、行動連携を疎外した要因、行動連携の原則と方法等について分析・検討することのできる力が必要であること。これらの成果は、各自が専門職種を超えて実効性のある行動連携を進め、現代社会が抱えている子ども虐待に対応できる力量形成の糧になったと評価しています。  
担当教員代表 丸田 秋男

Report.11

## 脳卒中四肢麻痺者の在宅生活支援



理学療法学科・作業療法学科・義肢装具自立支援学科・健康栄養学科・看護学科・社会福祉学科の6学科16名の学生が下記対象者の在宅生活支援について充実した検討をおこない、今後の介護計画について発表をおこないました。

対象者は50才代女性で脳幹梗塞のために四肢麻痺になりました。重度な四肢体幹麻痺と脳幹梗塞に伴う多くの合併症がみられ、重症でしたが、家族とは病前から信頼関係があり、夫と長男夫婦は自宅への復帰を希望していました。このため理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・社会福祉士・看護師・医師をはじめ、地域の訪問リハビリテーションのスタッフが力を合わせて、介護保険も活用しながら在宅復帰の準備を始めました。ケアマネージャーをはじめとするスタッフは介護機器や設備の準備を始め、訪問看護、介護、リハビリテーションの計画を綿密に立てていきました。退院の翌日には医師と看護師が家庭訪問をし、訪問看護ステーションのスタッフは週間介護・リハビリテーション計画を立案しました。しばらくして体調が良くなるとリクライニング車椅子に乗って屋内を介助で移動し、座ってテレビを見るなどできるようになりました。さらに、本人も一緒に外出ができるようになり、現在はデイケアセンターを利用しながら生活を続けています。

今回の総合ゼミは難しい症例でしたが、1人では支援しきれない事も他職種と連携することにより、支援の幅が広がることを実感した学生たちが、今後QOLサポーターとして更なる発展をとげることができると確信しました。  
担当教員代表 真柄 彰

## JICAの要請による生活習慣病予防に関する研修を実施しました。

NEWS 01

10月15日(金)～11月12日(金)までの約1ヵ月間、本学では独立行政法人国際協力機構(以下、JICA)の要請を受け、ソロモン・フィジー・マーシャル・トンガの大洋州4カ国から研修員5名を受け入れ、生活習慣病予防に関する研修を実施致しました。

近年、太平洋諸国では、生活習慣病による疾病・死亡率が著しく増加して、2005年には太平洋保健会議において生活習慣病の予防に関するプログラムの導入が決議されるなど、国家レベルでの対策が行われています。こうした状況を受けJICAでは、政府開発援助(ODA)の一環として、将来、各地域において生活習慣病予防の指導および対策計画の立案・普及を実践できる人材の育成を目的に「太平洋州における地域保健での生活習慣病予防対策コース」を設置し、日本での研修を実施しています。本学は、保健・医療・福祉の総合大学として、生活習慣病予防に必要な看護学、栄養学、運動指導、リハビリテーションの全てに関する教育・研究を実践していることから、大学としては日本で唯一、研修実施

機関として選定され、昨年度よりJICA受託事業として研修員の受け入れ及び学内外での研修を行っております。

今年で2年目となる今回の研修では、栄養・運動・看護における様々な研修プログラムを実践致しました。また研修期間中には、佐渡研修旅行やサッカー観戦などを通じた新潟県・新潟市との国際交流プログラムも実施されたほか、新潟市長への表敬訪問なども行われました。

本研修はJICAから3カ年計画での受託のため、来年度が最後となります。来年度は更に充実した内容を企画し、本学の特色を活かした国際貢献を行っていききたいと思います。



## 【健康栄養学科】教員採用試験(栄養教諭)に現役合格!!

NEWS 02

新潟医療福祉大学教職課程では、平成23年度採用の新潟県公立学校教員採用選考において、本学健康栄養学科から現役合格(栄養教諭での出願種別)を出すことができました。栄養教諭は平成17年度に制度化された職種で、小中学校における食に関する指導と給食の管理を職務としています。

以下、合格者を紹介いたします。

川崎 春奈さん(4年)は、学業だけでなく、「弁当の日」の指導や新潟祭りの民謡流しなど、学内外における活動に対しても積極的に参加し、責任ある役割を担ってきました。さらに学業の合間を縫って小学校の学習支援ボランティアにも参加しておりました。忙しい生活の中でも集中力と粘り強さで取り組んだ結果、見事合格をつかむことができました。

田邊 智子さん(4年)は、自宅が農家なので、農作業の忙しい時に

は積極的に畑を耕したり苗を植えたりするなど農作業に関わってきました。これは児童生徒に野菜作りの楽しさや取れたての野菜のおいしさとともに、食事の大切さを伝えたいという願いを持っているからでした。この願いを実現するために主体的に受験準備をし、最後まで努力し続けた成果があらわれました。

教員採用試験は大変な難関ですが、本学科では栄養教諭を育成するために、採用試験に必要と考えられる資料や書籍を本学科の教職担当専任教員の研究室に備え貸出するサポートや、受験者の質問や相談などに教職担当教員が個別に対応する体制を整えております。

本学ではこれからも、教員採用試験対策に多くの学生が参加できるように広く門戸を開いて、努力した人がきちんと合格できるような支援を続けてまいります。

## 平成22年度 保護者会開催報告

NEWS 03

11月6日(土)本学キャンパスにて平成22年度保護者会が開催されました。

保護者会は、本学学部生1年生から4年生全ての保護者の方を対象に実施され、保護者の皆様に本学の教育方針や指導体制、学生の修学状況や生活状況、就職活動状況などを説明し、本学の取り組みを理解してもらうとともに、懇談会・個人面談等を通して情報交換・親睦を深めることを目的として開催されています。

当日は530名を超える保護者が出席され、会場は終日熱気に包まれておりました。

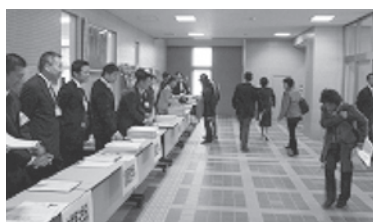
瀧川 悦雄 後援会会長の挨拶で幕をあげた会は、山本 正治 学長の挨拶、学生代表グループによる発表と続きました。

昼休憩を挟んだ午後からは、学科別に分かれて各専門の先生から具体的な取り組み状況について説明が行われ、その後、懇談会、個人

面談という順序で進められました。いずれの学科でも、学生の生活に関する内容を中心に率直な意見が交わされました。

会終了後、保護者の皆様から「こらからの医療は多職種間連携が大切であり、学生のうちにそれらを学べることは職場での即戦力になることが分かった」「学生たちが楽しく発表している様子に温かみを感じることが出来た」「新潟までは片道4時間ほどかかりとても遠いのですが、大学生活の様子や勉強・進学・就職等についての大学の取り組みが分かりとても良かった。次回もまた参加したい」(平成22年度保護者会アンケートより抜粋)などの意見を頂き、保護者の皆様の教育への熱意を強く感じた会となりました。

本学では、今回の保護者会にて頂戴したアンケート内容をよく検討し、本学の教育・研究活動に反映するとともに、今後とも保護者の方々との連携を大切にまいります。



# 伍桃祭を終えて

## 第10回伍桃祭(大学祭)報告

今年の伍桃祭のテーマは、「STAND BY～支えたい～」です。学生が学部学科を越えてお互いに支え合える関係を築きたい、患者様を支える存在でありたい、また大学のある北区の地域の皆さんとより密接に関わり合いたいという願いを込めました。そこで、今年度は例年以上に地域の皆さんにも参加していただけるような参加型の伍桃祭を企画しました。

毎年の恒例となりつつあるフリーマーケットは昨年よりも規模を大きくし、雨の中にも関わらず、たくさんのお客様が来てくださいました。他にも「すまいるはぁ〜と」という名の参加型写真アートで、写真に「あなたの支えたい人は誰か」を書いていただいたり、「バンダナを付けた実行委員を探せ」という企画で幅広い年齢の方に参加していただいたりしました。

昨年に引き続き、地域密着型の大学祭ということに重点を置いて企画しており、今年は昨年以上に盛り上がる事ができたと思います。

また、その他のイベントではRAG FAIR、ひなた、渡部 陽一さん、大倉 修吾さんをお呼びしてライブや講演会を行ったり、9学科それぞれの学科パフォーマンス、学科対抗イベントなどが行われ、会場となった体育館や大講堂から溢れるほどの人にご参加いただきました。

最後になりましたが、無事に10周年を迎えた伍桃祭を終えることができたのも、学生や教職員の方々をはじめ、地域の方々や企業の方々など、多くの方々にご協力していただいたおかげです。そして、一緒に企画・運営をしてくれた校友会・伍桃祭実行委員に感謝いたします。ありがとうございました。

第10回伍桃祭実行委員長 大井 結季



# 受験生のみなさんへ

## 春のオープンキャンパス 3月26日(土)

新2・3年生に向けて、「大学概要・入試概要説明」はもちろん、「施設見学」や「個別相談」「体験コーナー」など様々なプログラムを用意しています。また、保健・医療・福祉分野の仕事内容や資格、養成校の最新情報、大学と専門学校の違いなど、みなさんの進路選択に役立つ情報が満載の「進学総合ガイダンス」など春のオープンキャンパス限定のプログラムも計画しています。どうぞお気軽にご参加下さい。



## 入試案内

### 一般入学選考試験(前期日程・後期日程)

- 「第2志願制度」でさらに合格へのチャンスが広がります!

※理学療法学科、看護学科を第2志願とすることはできません。

- 前期日程では全国7都市、後期日程では全国3都市に試験会場を設置!

(前期日程会場:新潟・東京・郡山・高崎・長野・富山・鶴岡)  
(後期日程会場:新潟・東京・鶴岡)

- センター試験利用入試との併願も可能!
- 前期日程での成績優秀者は、「特待生制度」により1年次の授業料全額免除!

### 募集人員

学科	募集人員	
	前期日程	後期日程
理学療法学科	30名	4名
作業療法学科	14名	2名
言語聴覚学科	15名	2名
義肢装具自立支援学科	13名	2名
臨床技術学科	35名	4名
健康栄養学科	15名	2名
健康スポーツ学科	22名	2名
看護学科	32名	3名
社会福祉学科	30名	3名
医療情報管理学科	18名	2名
計	224名	26名

### 入学選考試験日程

入試区分	出願期間	試験日
前期日程	1/6(木)~1/24(月) [消印有効]	2/4(金)
後期日程	2/7(月)~2/18(金) [消印有効]	3/2(水)

※大学入試センター試験利用入試(前期日程・後期日程)も実施します。詳細につきましては入試事務局 (tel:025-257-4459)までお問い合わせください。



新潟医療福祉大学

〒950-3198 新潟市北区島見町1398番地  
TEL025-257-4455(代) FAX025-257-4456  
URL <http://www.nuhw.ac.jp/>  
携帯サイト <http://www.nuhw.jp/m/>  
【入試事務局】TEL025-257-4459  
E-mail [nyuusi@nuhw.ac.jp](mailto:nyuusi@nuhw.ac.jp)

誌名「QOLサポーター新潟」の由来

世界一の長寿国となった我が国では、「いのちの長さ」を伸ばすことと同様に、「生活の質、Quality of Life, QOL」を豊かにすることが、益々重要になっております。新潟医療福祉大学では障害者、高齢者などのQOLを高くすることを支援する(サポート)人材を育成します。このような人材を「QOLサポーター」と名づけました。そして皆様に本学の内容、活動をお知らせする広報誌を「QOLサポーター新潟」としました。

